



賀正「ピョンと一歩」絵手紙 後援会員Aさんより

5期目に挑戦します！みせ麻里です 2023年4月は浦安市議会議員選挙！

後援会のみなさん、新年あけましておめでとうございます。

4期16年間のご支持、ご支援に心から感謝申し上げます。寄せていただいた熱い期待に励まされ、しっかり応えようと議会活動、党と後援会の活動、生活相談、毎週の日本共産党浦安市議会報告の発行を取り組んできました。

今年4月23日投開票の予定で浦安市議会議員選挙が行われます。みせ麻里5期目に挑戦する決意です。引き続きよろしくお願ひいたします。

岸田政権はコロナ禍と物価高騰の中、年金削減、医療・保険料引き上げなど、国民の命と生活を削る政策を続け、戦争の反省に立たない憲法違反の大軍拡へ税金を更に注ぎ込もうとしています。

一方で、来年も年金の減額が計画されていて怒り心頭です。増える年金と賃金が必要です。

マイナンバーカードの普及を浦安市も促進していますが、国民の情報をグローバル企業のアマゾンやグーグルに提供する仕組みであり、システム開発に莫大な税金も投入されています。

国の悪政から浦安市民をまもる防波堤の役割を担うのが市の本来のあり方です。

ところが、今年度から公園駐車場の有料化を開始し、国保税の引上げ、補聴器の助成制度に所得制限を導入、奨学金の対象者を狭めるなど、市民負担を強めています。

日本共産党以外の政党・会派は市長の提案する議案や予算案に何でも賛成する「オール与党体制」です。

国民の平和と暮らしを守るために闘ってきた日本共産党の100年の歴史を受け継ぎ、子育てから老後まで浦安で安心して生活できるよう全力をつくす決意です。

みせ麻里市議会議員の「ひとこと」⑫

映画「ラーゲリ(収容所)より愛を込めて」を観て

収容所から生還した岡崎国蔵さんを思う

先日、映画「ラーゲリより愛を込めて」を観た。この映画の原作は、辺見じゅんのノンフィクション「収容所から来た遺書」だ。

第二次世界大戦終結後、ソ連軍の捕虜として不当にシベリアの収容所に抑留された日本人・山本幡男の姿を描いたものである。わずかな食料しか与えられず、零下40度という過酷な状況下で重労働を強いられながら、山本は、「生きる希望をすててはいけません。帰国の日は必やってきます」と捕虜たちに訴え続ける。山本の行動に勇気づけられる捕虜たち。山本は病に倒れ、捕虜は日本へ帰国する。帰国した捕虜たちから、山本の遺書が山本の妻モミジに届けられる。

辺見じゅんは、「収容所から来た遺書」の「あとがき」で、「昭和51年の厚労省の調査によると、旧満州、樺太などからソ連軍によってシベリアに連行された日本人は、民間人をふくめて57万4530人という。

しかし、ソ連国防省軍事図書部刊行の『第二次世界大戦』（1948年刊）の記録では、「日本人捕虜60万9176人」と記されている。今日もなお、その正確な数は把握されていないのが実状である。

広大なソ連領内の各地に設けられた捕虜収容所は約1200ヶ所、その所在地も、東はカムチャッカから西はドニエプル川の流域、北は北極海に近い極北の地から南はパミール高原の西麓という広大な地域に点在している。それらの「ラーゲリに収容された約60万人の日本人のうち、極寒の異郷の地で飢えと重労働の日々、望郷の思いを抱いたまま果てた人々の数は、一割を超える7万人以上といわれている」と書いている。

映画を観て、私は岡崎国蔵さんを思いださずにはいられなかった。岡崎国蔵さんは、日本共産党の浦安の町議、市議をやった私の先輩である。

岡崎さんは1940年（昭和15年）に兵役となり、中国東北部（旧満州）で終戦をむかえ、ソ連の捕虜となり北朝鮮に連行される。岡崎さんは、「これから日本に帰る」と告げられ列車に乗せられ、毎日毎日同じ景色のところを走る列車に「おかしい」と思っていたが、着いたところがシベリアの収容所だったと言っていた。

岡崎さんは、49年（昭和24年）にシベリアから生還することができた。「生きているうちに自分が連行されたシベリアの収容所に行ってみたい」と言っていたが、果たせず亡くなった。「新春のつどい」などの集まりがあると、収容所のスピーカーから流れるロシア語の「カチューシャ」を覚えたのだと言って、よくロシア語で歌っていた。語りかけるように歌う岡崎さんの歌は魅力的であった。

「浦安町誌」（上）に、「日華事変並びに太平洋戦争戦病死者」一覧が載っている。ここには戦病死者の「本籍、戦病死者名、戦病死年月日、戦病死場所」が記されている。調べてみたら、シベリア抑留でなくなった浦安の人が7人もいることが分かり驚いた。

2022年12月17日

七里 一司